

全体討議

○藤田 それでは、この後、全体討議に移りたいと思います。パネリストの先生方、カメラをオンにしてお戻りいただけますでしょうか。

ありがとうございます。それでは、全体討議に移ります。全体討議の進行は丸山先生にお渡しします。丸山先生、よろしくお願いいたします。

○丸山 ありがとうございます。それでは、残り時間 30 分弱ではございますが、全体討議をしたいと思います。本日、私のほうで用意したトピックはこちらの二つですが、まずは今日ご視聴くださっている皆様のほうからご質問などありましたらお受けして、それから全体討議に入りたいと思いますが、いかがでしょうか。ご質問等ある方がいらっしゃいましたら、挙手をさせていただいて、初めにご所属とお名前を言っていただいてからご質問いただければと思います。数野先生、どうぞ。

○数野 今日ありがとうございました。立教大学日本語教育センターの数野と申します。ご講演ありがとうございました。先ほど丸山先生から説明があったように、今後新しいタイプの留学生を受け入れていくために、集中日本語というクラスもあるんですけども、そのほかに、専門の日本語で 1 学期間の中で 1 冊、その学部だったり学科で推薦されている本を、1 学期を通して読んでいくというクラスがありまして、それは週に 1 回、日本語教師と会ったり、あとチューターの学生に会ったりするんですけども、どのようなサポートがあったら N3 レベルぐらいの日本語学習者がそういう日本人向けの本を読んでいけるとか、どのようなサポートがあると学生としてはありがたいとか、何かアドバイスありましたらお聞きしたいなと思います。よろしくお願いいたします。

○丸山 先ほど申し上げた専門の入り口に立つという部分ですね。そこの詳細について私のほうでご説明がしておりませんでした。具体的には学部から推薦していただいた図書をチューターと共に一生懸命読んで理解をしながら、専門の世界を少しずつこう開いていく。なので、専門の入り口に立つということをお願いいたします。具体的なこういった活動があると、より明るく励まされた気持ちを持ってしなやかにこのハードルを乗り越えていけそうかという、そこのところについて数野先生からご質問があったのですけれども、いかがでしょうか。ミビン先生、

いかがですか。

○**ミビン** 私が日本で勉強したときに、チューター制度を利用しました。これはとてもありがたいことですね。そのときは千葉大学だったんだけど、チューターはいろんなサポートをしてくれます。もちろんその中の面に日本語のチェック。日本語の校正とか、レポートとか発表の内容で日本語を校正してくれたりとか、また日本の生活に早く慣れるためにいろんなところに連れて行ったりとか、また必要な情報を教えてくれたりとか、そういうことをサポートしてくれたので、日本の生活に早く慣れましたし、教科ですね。ゼミとか日本語の理解も、いろいろサポート、いろいろ助けてもらいました。

○**丸山** ありがとうございます。トゴス先生。

○**トゴス** ありがとうございます。今の数野先生からの質問は、専門書の読解の授業中にどのようにサポートしたらって質問だったかと思いますが、これに関しては、例えば、学生が、よりその各章ごとに読む力が伸びることは、書く力が伸びることにつながると私たちは理解しておりますので、その節ごとあるいは章ごとに、読んだ内容を生徒がまとめて書く。要約ですね。それに関する先生の添削があたりすると、より学びが進むのではないかというふうに考えます。

○**丸山** はい、ありがとうございます。ルッシー先生からお願いできますか。

○**ルッシー** ミビン先生と同じなのですが、やはりチューターが必要だと思います。先輩たちと定期的にゼミに参加することが必要だと思います。前にちょっと筑波大学で勉強した経験から言うと、やはり先輩がいると、外国人でもいろいろな情報がすぐ手に入りやすくなると思います。

○**数野** ありがとうございます。

○**丸山** ありがとうございます。勉強の面でも生活の面でも先輩がいたり、それからチューターがいたりってところでいろいろ話が気軽にできる。それから、細かにちょうどいいタイミングで情報交換ができると助かると。それから読む力っていうのが書く力、発信につながっていくんだっていうお話をいただきました。ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。金庭先生。どうぞ、お願いいたします。

○**藤田** 金庭先生、お声が聞こえていません。

○**丸山** ちょっと時間も限られていますので、金庭先生からのお声が出てくるまで、ほかにいかがでしょうか。それでは、まだちょっと金庭先生からの声が聞こ

えないようですので、時間も限られておりますので、こちらで用意をした全体討議の論点のところに進んでまいりたいと思います。

こちらが本日用意した質問です。今日少しご講演の中でも触れていただきましたが、生徒さんたちは留学先の大学でこういった領域を学ぶことにご関心があるかについて少し教えていただければと思います。じゃあ、今度はトゴス先生からいきますか。

○トゴス こちらの質問に関しましては、先ほど発表の中でも少し述べさせていただきましたが、留学先の学部領域は、ほとんどが、新モンゴル生は数学に強いので、経済学部や経営学部、また工学部が主になっております。またそのほかにも、農学部や国際関係学部にも留学生は数多くおります。

立教大学とは、立教大学の私たちに提案している8つの学部の中でも、最も今、興味を本校としては引いているのは、法学部、また心理学部、また異文化コミュニケーション学部の中でも日本語教員の養成ですね。そういったところが、私たちもこれまでの留学先としてはなかなか卒業生の要望に応えられなかったところがありますので、こういった点で期待しております。

○丸山 ありがとうございます。じゃあ、ルッシー先生、いかがでしょうか。

○ルッシー ありがとうございます。本校では、今までやはり科学部や工学部への関心が高いと思います。2年前から高校の教育に導入している異文化理解にも興味を持っている生徒たちがいるようです。

○丸山 ありがとうございます。国の教育政策と連動して、生徒の関心もいろいろ広がっているということですね。ありがとうございます。ミビン先生、いかがでしょうか。

○ミビン お二人の先生がおっしゃったとおりです。やはり高校、あるいは学生によって、強みや関心を持つ分野が違いますが、先ほどご紹介した大学附属高校の生徒たちであれば、社会科学系が強いので、経済や言語に興味を持っている人が多いのではないかと考えています。また、担任の先生からも聞いたのですが、私から見ても、最近の異文化理解に興味持つ子どもたちが非常に多くなってきていると思います。理工系専攻の生徒だったら、理工系のほうに興味を持っているのかなと思います。

○丸山 ありがとうございます。池田先生からもいかがでしょうか。

○池田 では、私から。コメントありがとうございます。理工系っていう声が

上がるのではないかというのは8割9割予想をしておりました。立教大学、10学部あって理学部があるのですが、残念ですが、今回の受け入れについては理学部はごさいませんので、社会系、それから人文系の学部で生徒さんたちを受け入れていくということになると思います。経済、それから経営、それから心理、それから異文化コミュニケーション。そのような学部、学科でも受け入れがごさいます。異文化理解という声のごさいましたが、先ほど私がスライドの中で申し上げましたように、8つの学部の中のどの学部を選んでいただいたとしても、おそらく立教大学に入っていたいただいた生徒さんたちは異文化理解、それから他者理解、そういうものを4年間で身につけて卒業していくことができる教育内容だと思っています。例えば、経済に興味がある学生、あるいは法学に興味がある学生、異文化コミュニケーションに興味がある学生、それぞれがその専門を学びながら、学部内、それから正課外のさまざまな取り組みを通して、異文化理解については同じように身につけていくことができると思っています。私からは以上です。

○丸山 ありがとうございます。浜崎先生が手を挙げてくださっています。ご発言をお願いできますでしょうか。

○浜崎 異文化コミュニケーション学部の、現在学部長しております浜崎と申します。先生方、それぞれのご講演どうもありがとうございました。今、異文化交流、あるいは異文化コミュニケーション学部という声を先生がたから伺って非常に嬉しく思っております。ぜひ皆さんの学生さんたちをこちらでお迎えできればというふうに思っていますが、今日のお話の趣旨、池田先生のお話、それからそれぞれ留学生を送り出す側、あるいはご自身も留学なさったお立場で先生方からご発言があったと思うんですけども、例えばバディのシステム、例えばサポートのシステムが非常に有効だということ。これはもう当たり前のことで、私たちの学部はそれをどれぐらいいい形でやるかということを考えています。

あともう1つは、留学生が入ることで立教大学が変わっていく。私たちの学部が変わっていくということが今後の目標だというふうに考えています。そこで、先生方ご自身の日本での留学のご体験から感じられた日本の問題を教えていただきたい、たとえばミビン先生のお話の中に、ベトナムの学生が日本に留学するときに、ぶつかる問題というのが日本の大学の教育の柔軟性の問題だということをお話があったかと思います。こういうところが日本で変われば良い、あるいは自分たちの国、インドネシアからモンゴルからベトナムから日本に、あるいは日本

の大学にぜひポジティブなものとしてこういうものを持っていきたい、こういうものを日本にもたらしたいというふうに考えていらっしゃるものがあれば、ちょっとそれを教えていただければすごくありがたく思います。よろしく願います。

○丸山 いかがでしょうか。トゴス先生、いかがですか。

○トゴス ありがとうございます。私自身は日本留学中においては、先ほど言っていた、やはり教育の柔軟性といったところでは問題も感じておりましたし、より学生がチームとなってプロジェクトですね、そういったものを作り出す。その成果を認め合うっていう形がもっとあったらいいのではないかと考えておりましたけれども、立教大学に関しては、そういった取り組みがすでに行われているので大変よいかというふうに思っております。新モンゴル卒業生に関しては、モンゴル人の性質としては、アジア的な考え方も持ち合わせながら、よりそのロシアに近い、長い間一緒にいたということで、ヨーロッパ的な、より自分の発言を協議し合ったりとか、そういったところが得意でございますので、皆さんが取り組んでいらっしゃるこの取り組みにおいて、協議であったり、チームになって1つのものを作りあげていく中で、モンゴルの学生はリードしていくのではないかとこのように考えております。

○丸山 ありがとうございます。ミビン先生はいかがでしょうか。

○ミビン これについては、子どもたちがまだ日本に行っていないので、例えば、日本の大学で日本語を教授言語にした科目をちゃんと学べるか、また日本語だけでなく英語でも学べるのが心配という意見がありました。ベトナムの生徒はN1とかN2を持っていても、やっぱり日本語で会話するのはあまり得意ではないという子どもが多いです。そのような場合は、英語でレポートとかゼミで発表できるのかとか、その場合はどのように評価されるかなどの心配があります。また、日本の大学の生活の中で、例えば、友達づくり仲間づくりとか、そういう点に心配があるようです。こういった点は何か情報を共有していただければと思います。例えば立教大学はこういうところが強いとか、こういう学習環境があるとか、そういう情報があれば、子どもや保護者の心配をクリアできるのではないかと思います。以上です。

○丸山 ありがとうございます。ルッシー先生、いかがでしょう。

○ルッシー ありがとうございます。やはりお二人の先生と同じですが、うちの

学校では、お二人の先生と比べたら、能力試験の合格レベルが低く、N4 ぐらいのレベルです。この間、日本の大学に進学したいについて調査をしてみたら、100 人の中 20 人ぐらいがやはり進学したい。でも、日本語ができないので生活が難しいのではないのかという生徒自身の心配、そして親の心配がとても大きいことがわかりました。もし日本に行ったら先輩や日本人の友達が簡単に作れるだろうかという心配もあるようです。私自身は、前に筑波大学で日本人の友達たくさん作りたかったのですがけれども、なかなか作るチャンスがありませんでした。外国人同士でどうやって日本人の友達と仲よくできるのか、どんな部活に入るのか、結構難しかったんですね。そういった経験と重なります。

○丸山 ありがとうございます。3 先生からお答えをまとめますと、成績評価につながる部分と、それから人間関係の構築という部分と、2 つ出てきたのかなと思います。視聴してくださってる方からも共通するご質問を受けていまして、GPA と日本語力っていうのが強く関連するんじゃないか。そのときに、GPA は学生の外での評価、それから奨学金とかにもいろいろかかわっているんだけど、その点についてどう考えますかっていうご質問をいただいています。これは立教への問いかけにでので、今の 3 先生のお答えと今の質問を受けながら、ちょっと池田先生のほうから少しお話しただけですでしょうか。

○池田 わかりました。まず、日本の大学の柔軟性のなさっていうところから発したやりとりだと思って聞いておりました。これは本当に個人的な、私個人の考えですがけれども、日本の大学が目指すべきは、さっき私のスライドで最後にお示したように、「この学生は留学生」、「この学生は日本語が N4 とか N3 とか N5 とか N1」とかっていう、そういうところに入っている枠が違うっていう形ではなくて、それぞれが自分の持っているものに応じて科目を履修し、それが自由にできる状況になりながら、4 年間で歩いていけるような姿に大学がなることだと思っているんです。そうすることで、例えば、自分は日本語と英語の科目を 50%50%で履修をしながら立教大学を卒業したいとか、いや、自分は 70%30%で卒業したいとかっていうことが自由にできるようになっていく。そうすると、自分が高い英語力を維持したいっていう学生は、それなりの英語の科目も履修しながら出ていくでしょうし、いや、日本語力をもうちょっとつけたっていう学生は、そうじゃない。だから、そういう自由な環境をつくっていくっていうのがやっぱり日本の大学がこれから目指していく姿なんだろうというふうに思います。

そうは言っても、日本、あるいは立教大学だけかもしれませんが、その柔軟性というところにおいてはまだまだ先が長いというふうに私自身は感じています。なので、例えば視聴者の方からも質問があったように、「そうは言っても日本語力と GPA ってというのが密接に関連している。さらにその GPA ってというのが奨学金だの何だのっていうところに結びついていくんじゃないか」という質問に結びついているのだと思いますが、それについては大学として、本当にその学生が学んだのかどうかということと、日本語の能力がどうかということを切り分けて学生を評価していくための枠組みをしっかりと、事例をもとにしながらお示していくしかないんだろうというふうに思っています。おそらく異文化コミュニケーション学部の中では、そういう取り組みってというのが少しずつ始まっている。だから、異文化コミュニケーション以外の学部ではっていうような質問内容になっているのではないかと思います。

私自身も日本語母語話者で、英語は私にとっては外国語です。私自身が何かのことについて、例えばある学問についてどのぐらい理解しているのかということ自分の英語力ではかられるのは、やっぱり嫌だなんていう思いがあります。だから、そこを明確に区別して評価をしていくような形を、立教大学としては模索していく。その姿勢を、留学生に対してきちんと示していくということが大学としての誠意であり、役割なんだろうというふうに思っています。

また、人間関係については、私は個人的に立教大学の中では心配はしていません。先ほどのチューターであったり、1年間の寮生活を支えるレジデントサポーターであったり、さまざまな形で二重三重に学生をサポートしていくシステムを構築していきますので、そういう形でしっかりと学生を育てていけると思っています。以上です。

○丸山 どうもありがとうございました。もう少しで予定の時間となりますが、2点目について、ぜひ意見交換をという声を事前にもちょうだいたしておりますので、短い時間ではありますが、少し10分ほどお時間を延長させていただいて意見交換をさせていただきたいというふうに思います。

2つ目の論点です。よりよい学びのために、寮生活においてどのようなサポートを期待しますかという内容でございます。先生方、いかがでしょうか。トゴス先生、お願いします。

○トゴス よろしく申し上げます。寮に関しては、私の講演でも述べさせていた

だきましたが、学生はやはり日常的な細かいトラブル、小さなトラブルに入ってしまうことが多くて、その積み重ねが今度学習自体にも影響してくるっていう問題もあるので、寮の中で、例えば、寮の先生ですかね、昔のような先生を配置したり、また定期的に寮の中でも学習といいますか、指導を行う、定期的なそういった話し合いの場であったり、日本のシステムはこうなっているっていう話を説明させていただければ、学生によりよいサポートになるのではないかだというふうに考えます。

○丸山 ありがとうございます。本当に日常の小さないろんな悩みというか、トラブルですね。そういうところが積み重なって大きなストレスになるというのは、よく留学生と出会う自分としては本当に理解できるところです。ありがとうございます。ミビン先生、いかがでしょうか。

○ミビン やはり入学生にとっては、寮に入れるかどうかはどうかはすごく大きなポイントだと思いますね。

○丸山 そうですね。寮に入れるかどうかっていうのが大きなポイントですね。ちょっとミビン先生のお声が聞こえなくなっていますので、先にルッシー先生、お願いします。

○ルッシー ありがとうございます。そうですね、私たちはイスラム教の信者ですので、立教大学に留学する生徒たちがイスラム教でしたら、やはりお祈りのところがあれば大変助かると思います。お昼のお祈りがありますので、小さくても、どこか奥の、静かなところにお祈りができる所を用意していただくと助かると思います。また、食べ物も肉以外の、ベジタリアンのメニューがあったら助かります。ハラール肉がない場合でも、ベジタリアンのメニューが食堂にあれば大丈夫です。あと1つ、日本人とのおしゃべりの機会があるといいと思います。週1回または1カ月に1回ぐらいでいいのでおしゃべり会のチャンスがありましたら、日本語の会話力も上達し、留学生活が結構充実するのではないかなと思います。

○丸山 ありがとうございます。厳先生から手が挙がっていますので、このままちょっと続けていきたいと思います。厳先生、どうぞお願いいたします。

○厳 3名の海外からの講演者の先生方、本日は大変興味深いお話で勉強になりました。時間がないので簡単に質問させていただきたいと思いますが、実際、今回新しい留学生受け入れる制度の検討のところで、留学生の寮の整備についてもいろいろと検討しておりまして、今ルッシー先生からおっしゃっていただ

きました、ハラルとかベジタリアンの対応とか、プレイルームの整備とかっていうことも、今キャンパスが2つある中で、1つにはあって1つにはないとか、という状況なんですけれども、ぜひ整備していきたいというふうに考えています。

また、トゴス先生におっしゃっていただいた、留学生が日常的に相談ができる相手の存在の必要性については、池田先生のお話の中にもありましたけれども、留学生寮の中にレジデンスサポーターというものをちゃんと置いて、日常的なサポートを行っていく、そういう計画で今準備を進めております。

そこで、1つだけ教えていただきたいんですけども、特にルッシー先生が先ほどおっしゃいましたイスラム教の学生さんが寮生活をするときには、特に女子の場合ですと、フロアを分ける必要はあるんでしょうか？日本の今の学生寮っていうのは、男女共同で同じフロアにみんな自分の個室を持っている場合が多いですけれども、どうでしょうか。もしかすると同じフロアでも「女子が使うエリア」というふうに区切りをすれば対応が可能なのか、それともそもそもフロアを分けたほうがいいのか。その辺について少しアドバイスをいただければと思います。

○ルッシー ありがとうございます。そうですね。できたら嬉しいですね。例えば、1フロアは男性。1フロアは女性で、マンションと同じく下のほうに男が住んでいるという感じになると嬉しいです。部屋が別々で、部屋の中にお風呂とかシャワー、トイレがありますか。

○蔽 ありますね。

○ルッシー そのような形なら大丈夫です。ヒジャブは自分の部屋を出るときは必ずかぶらないといけません、自分の部屋にせてトイレがありましたら、大丈夫だと思います。

○蔽 ありがとうございます。トゴス先生、モンゴルからの学生にはこのようなフロアに関する要求とか結構あったりするんですか。

○トゴス それは特にはないですね。大丈夫です。

○蔽 ないですか。ベトナムは私も行ったことがあるので、おそらくないのかなっていうふうに思うんですけど、やっぱりこうやってイスラム教の、特に女子学生にはある程度の配慮が必要だということを今日教えていただきました。先生方、ありがとうございました。

○丸山 蔽先生、ありがとうございます。今、蔽先生から寮で手厚いサポートがあるっていうお話をさせていただいたんですけども、先ほどちょっと途切れてし

まったんですけど、ミビン先生からは、寮に入れるかどうかというのが大きなきになるってようなことを言っていました。そののところには、ミビン先生のご発言の背景には、ネットワークの構築のところがあるのではないかと思います。その部分も含めて、ちょっと池田先生から最後にコメントをいただけますでしょうか。

○池田 まず、寮に入れるかどうかということですが、入れるかどうかではなくて、今回、立教大学が考えている受け入れは、1年間寮に住んでいただかなければいけないというプログラムになっています。しっかりと大学の中、それから日本の中、学部に着地をしていただくというために、1年間全ての生徒さんに寮で生活をしてもらうプログラムになっています。

また、寮の中でのレジデントサポーターの役割についても、今回、先生方からいただいたさまざまな視点を取り入れながら、プラスアルファで、ただそこで生活をする生活の困りごとを解決するだけではなくて、もう一步踏み込んだ形の学びが寮の中で展開されるような形を構築していきたいというふうに思っています。以上です。

○丸山 どうもありがとうございました。時間が大変押してきましたので一旦ここで全体討議終わりにして、閉会の辞に移りたいと思います。バトンを藤田先生にお渡しいたします。皆様、ありがとうございました。

